



ザ・サークル

# INTERVIEW

## 原作翻訳者・吉田恭子が語る、小説と映画「ザ・サークル」

現代アメリカ文学・出版界においてデイヴ・エガーズはすごく重要な作家なので、今回翻訳のお話を頂いたときに、これはやっぱりやらなきゃいけないだろうと思いました。その時点ではデビュー作の「驚くべき天才の胸もはりさげんばかりの奮闘記」しかちゃんと読んでいなくて、それがまたへんてこりんなユーモアで強烈な語り口なんです。ただ、「ザ・サークル」はストレートに物語を語っていくつくりになっています。長いですが、アップダウンがうまい。わあっと盛り上がったところで、何かが起きてピンチ！事態が収まってきたところでまた次、という途切れない展開が秀逸です。エガーズは純文学的な作家と見られがちですが、本作では明らかにエンタメを意識していると思います。翻訳をする際に原語を日本語に置き換える際の違和感を出すのか、出さないのか、というのは訳者に任せられているんですね。作品によってはあえてスムーズな日本語にしないという選択もあるんですが、「ザ・サークル」に関してはスピード感をもって読めるように努力しました。

このストーリーの舞台は北カリフォルニアで、サンフランシスコを中心としたいわゆるベイエリア。あの地域独特の雰囲気がよく出ていると思います。スタンフォードやパークレーなどの名門大学があって、スタートアップ企業やベンチャーも多い。世界のあらゆる問題に対して必ず解決策がどこかにあって、テクノロジーがそれを提供できるんだと信じている人たちがたくさんいます。イーモン・ベイリーはまさにその典型ですよ。ディストピアを作り上げている人たちに悪意がないところがこの物語のユニークな部分で、それがかえって恐ろしいんです。エガーズ自身も北カリフォルニアで暮らすなかでそういう人たちに出会って、批評的な視線があったのではないのでしょうか。

エマ・ワトソンのキャストिंगは真面目で頑張り屋なメイにぴったりでした。彼女の自らのキャリアを自分で選んでいく姿勢もメイに重なります。トム・ハンクスとの相性も良かったです。映画独自のラストには思わずなっていました。全てを支配しようとしている〈サークル〉のトップにシーチェンジを渡すことで悪者をやっつけたような結末になっている。でも、彼

女がしたことは全世界の“透明化”というディストピア完成への危うい一歩でもあります。そこに両義性を持たせるのがうまいな、と。また、自分が渦中にいると今起こっている事態の全貌が見えず、俯瞰でのものを考えられないということがあります。観客はそれに近い状況に陥ったところで映画が幕を閉じる。それまではメイと一緒に物語を追っているのだけれども、最後になって放り出されてしまう。そこで考えさせられるのが、この映画のいいところじゃないかなと思います。

### 吉田恭子 よしだ きょうこ

ウイスコンシン大学ミルウォーキー校英文学科創作専攻博士号取得。作家、翻訳家、立命館大学文学部教授。著書に「Disorientalism」(Vagabond press)、「ベースボールを読む」(慶應義塾大学出版会)、訳書に「デイヴ・エガーズ」ザ・サークル、「王様のためのホログラム」、「ベスト・ストーリーズIII カボチャ頭」収録 ゲイリー・シュタインガート「レニー・ユエニス」(早川書房)など。

### 「ザ・サークル」デイヴ・エガーズ著 吉田恭子訳 ハヤカワ文庫



人間とインターネットの未来を予見して世界を戦慄させた、笑いと恐ろしさに満ちた傑作ディストピア小説がついに文庫化。2013年に発表された本作は、「ニューヨーク・タイムズ」をはじめとする有力紙誌で年間ベスト・ブックに選出された。映画とは異なるラストがあなたを待ち受ける――。

### デイヴ・エガーズ (原作/脚本)

1970年、アメリカ、イリノイ州生まれ。1988年に出版社マクスウィーニーズを創立。その後、両親を亡くし、当時8歳の弟を育てながら送った日々の回想記を「驚くべき天才の胸もはりさげんばかりの奮闘記」として出版。「ニューヨーク・タイムズ」のベストセラーリストに40週連続でランクインし、ピューリッツァー賞にノミネートされる。続いて、全米図書賞にノミネートされた「王様のためのホログラム」は、トム・ハンクス主演で映画化された。その他、『かいじゅうたちのいるところ』(09)の脚本、『プロミス・ランド』(12)の原案を手掛ける。